若御前！

法音院大會

「っしゃオラァ！あぶねー！」

「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｔｈｅ　ｃｈａｍｐｉｏｎ！」

若御前は生臭坊主である。ＦＰＳが上手い。ゲームが全体的に好きである。父親の持っていた寺を四年前に受け継ぎ、房総半島の山の中の三つの部落の管区も同時に引き継いだ。

この部落には父親に幼少期から連れられてよく来ていた。この部落は山田姓が多く、基本的に屋号で通っている。

だから、経回りで会っても、とっさに出てくるのは名前よりも、長年の感覚で刷り込まれた「田持（でんもち）のおばさん」や「台下（でいした）のご主人」という呼び方である。実際、父親が心不全で急死して、いきなり全ての管轄を任された時に初めて彼らの本名を把握したぐらいである。

ところで、「若御前」の本名は大定海翔である。元々は「かいと」であったが、法名として「かいしょう」となった。

しかし、本名ではなく「若御前」と部落の人々に呼ばれているのは彼の父が「御前様」と呼ばれていたからである。いつから住職が「御前様」になったのかは誰も知らない。彼の父がこの寶壽山圓観寺の住職になったときには既に「御前様」であった。

初めて彼が「若御前」になったのは中学一年の夏休みである。

既にお経はある程度読めたから、父の経回りに連れていかれただけのことであったが。その際に、「若御前に」ともらったコンソメのポテトチップスが彼の記憶にはある。他にもチョコレートなどをお布施の代わりにもらったりもした。それから毎年、休みになるたびにこの部落を訪れた。

虫取りもしたし、庫裏で昼寝をしたり、裏山に筍を取りに行ったり、雑草取りをした。何より部落の人々との交流が楽しかった。都会に住んでいて、祖父母も近くにいた若御前少年にとって、この部落は故郷であった。お布施代わりのお菓子に釣られたというよりはそういう魅力に引かれたにすぎない。

いつしか、部落の人々にとっても若御前は盆や彼岸のつきものになっており、受験勉強や風邪で行けなかった時は「あれ、今日はあの見習い坊さんは来ないのかい」などと言われるほどであった。

そういう関連になって今にいたる。その日は盆であった。

「若御前さまー！いるかー！」

ヘッドセットを取って玄関に向かうと、葱の飛び出たコメリのレジ袋を持って「サワのおっちゃん」が立っていた。乾いた泥の塊がフジツボのようにひっついて、紺色と泥の薄茶色がまだらになった長靴を脱いで、上がりがまちに腰かけて世間話を始めた。

「最近はよ、ネギもよぉ、どんどん高くなってきてるけどよ、物価もよ、たけえからよ」

「やっぱり、肥料とかも高いわけなんですか」

「そうなんだよ。輸送費もたけえし」

「そうそう。稼ぎもちょっとしかねえや。はは。あ、そうだこれ、お布施と卒塔婆代」

「どうも」

「そういえばよ、若御前様の卒塔婆の字も亡くなった御前様の字に似てきた気がするんだけどよ」

「最近練習してますからね」

「だからよ、仏壇に掛ける曼荼羅書いてほしいんでよ」

「そりゃまたどうしてですか？」
「御前様のが茶けて来てよ。どうせだから新しいのを書いてほしくてよ」
「いいですよ」
「じゃあ暮れに代金もってくるからよ。ところで地区で最近猪の罠仕掛けたからよ。あのー、裏の山の上ってくとこあんだろ。あそこの途中らへんに仕掛けたからよ。気ぃつけてな」
「そこの玄関の前の植え込みも掘られました。猪に」
「多いんだ。うちもやられた。そうそう、ヤマは車にぶつかられてボコボコよ。ありゃ買い替えだな」
「横からですか」
「そそ。あーいうのは横の崖みてーなとこからいっぺんに出てきて車道渡ろうとすんのよ」
「うちは父が何台もダメにしたって言ってました。鹿が二回だったか…。猪が…も、二回だったはずです」
「運わりぃね」
そういった雑談をしていると、正午を知らせる「ふるさと」が遠くのスピーカーからぐおんぐおんと流れた。
「じゃあ帰るからよ。後で経回りよろしくな」
「サワのおっちゃん」は庫裏の前にある駐車場代わりの空き地を、「中古でちょっと錆びてて頼りになる相棒」の軽トラで兎が軽く円を書きながら跳ねるように出ていった。去り際におっちゃんの右手がひゅっと車から出て、手を振った。
おっちゃんが帰ると、東京から来る途中にサービスエリアで買った塩パンとベーコンエピをストファイの大会のクリップを見ながら一気に食べ、法衣に着替えた。持ち物はお布施を入れる鞄とスマホとMOTHERのロゴが入ったほぼ日の手帳と数珠だけである。
国産の青色の普通車にしては小さい車に乗るとUndertaleのサントラがかかった。スマホで時間を確認するとチョコボの上に12：22と現れた。
経回りはその名の通り、盆などに各檀家さんを回って仏壇の前でお経を読むことである。若御前には決まった経回りのルートがある。それは父のルートと同じだった。
まずは寺に一番近い相野という部落で、ここは十一軒の檀家さんがいる。相野は山の合間の開けた土地で、一面が田んぼの部落である。その田んぼの中に家々が立っている。その日は稲の金色の中に家がもそっと置かれているようだった。
ルートの最初は「飯屋」である。「飯屋」と言っても飲食業には家族の誰も就いていない。家の引き戸を若御前が開けると朝ドラの昭和の家のような音がした。
「ごめんくださーい」
「あ、どうもー」
「飯屋のおくさん」が玄関に出てきて、奥の部屋に向かって怒鳴った。
「若御前様来たよー！野球の音消して！」
「あいよー」
「さぁ、二回ウラ！バッターは菱川！こ」
すりガラスの奥からの音が聞こえなくなった。仏壇にはマッチがなかった。
「…すいません火ないですか」
「マッチなかったですか？」
「ええ」
「じゃあチャッカマン取ってきます。すいません」
手持無沙汰になった若御前は長押に飾られた賞状や遺影を見ていると「飯屋のおくさん」にあと三十歳加えたらような顔の白黒の遺影があった。
「はい、どうぞ」
「ありがとうございます」
燭台は垂れた蠟でコーティングされ、少し柔らかい。爪で燭台の蠟をはがしてダルマローソクを置いて火をつけると静かに仏壇のあたりが明るくなった。後ろに「飯屋のおくさん」が正座したので若御前はお経を読み始めた。
「如来寿量品第十六…」
若御前は経回りのお経は暗記している。特に意識せずとも口が勝手に動いて読んでいる。だから、基本的に位牌の戒名の人々の名を読みながらお経をあげている。
位牌を見ると一昨年亡くなった「飯屋のおじいさん」のものが先頭であった。彼自身は小柄でおっとりした性格であったが、本人の希望でつけた戒名は「飯屋」の人々から「なんかゴツいね。でもおじいちゃんの希望だからいっか」という感想であったことを思い出した。
お経を読み終わるとお布施の入ったポチ袋と卒塔婆代の入ったポチ袋をいただいて立ち上がった。その直後、テレビの音が復活した。
「きほどの菱川のヒットが活きましたねー」
「失礼しましたー」
「あいよー」
「すいません主人が」
「別にいいんですよ」
帰る時も戸から昭和の家の戸の音がした。そして、「カド」「大宅（だいたく）」「まん中」「川辺」「川末」「奥屋敷」「ヘリ」「手前（てめい）」「大二郎」「洲（すう）」を通ってルートが続いていく。
経回りはどこも鍵なんぞかけていない。「ごめんくださ

ーい」と間延びする若御前の挨拶と同時に玄関を開け、入ってお経を読んでお布施をいただくことによって成り立っている。家々は古い新しいの差があるとはいえ、典型的な農家のつくりである。

次の部落は楡戸である。どうして県道に指定されているかわからないような一車線しかない道とゴルフ場につながる二車線程度の道、この南北にわたる二つの道にあみだくじの横棒のような何本もの細い道が森を貫いている。その「横棒」から毛細血管のような道が伸びて家々に繋がっている。

一度、若御前は高校の同級生で脳外科の友人に楡戸の航空写真を見せると爆笑された。

「なんだこれw人間ってすげーわwwwはははwww」

相野の農家形式の家と違って、楡戸の家々は一般的な間取りが多い。それは、彼らは街や学校に働きに行くか、果樹園の経営などをしているからである。

「サワ」もこの楡戸の家である。「旧家（ふるいえ）」「台下（でいした）」「井前（いのまえ）」「本家」「脇家」「サワ」「桑」「庄兵衛」というルートで若御前はいつも通る。

「井前」の前で対向車が来て、一車線しかない道のぎりぎりですれちがった。片方が崖になっているが慣れて何も感じない。

「台下」はいつもお茶を用意している。熱い緑茶が経を読み終わると出してくれる。彼の父が死んだ直後はたまにお盆の上に茶碗が二つ乗っていることがあった。

座布団の上で仏壇から右に四十五度方向転換して「台下」の人々の方を向くと、お茶と羊羹が出た。

「ありがとうございます」

「いや、こちらこそ」

「お茶あがってください」

「失礼します」

「ちょっと、若御前に挨拶しなー」

「こんにちは！」

「あ、どうもこんにちは。今、小二だったっけ」

「ううん、しょういち！」

「こら！隆！そんな言葉遣いないでしょ！」

「いいんですよ」

「この子ね、マリオやりたいっていうから最近一緒にやってるんですよ。」

「ゲーム機持ってらしたんですか」

「自分も根っからのファミコンっ子ですから。若御前も好きでしょ？」

「まあ、人よりかは。隆くん、何やるの？」

「えっとね、マリオとね、フォートナイト！」

「やっぱり人気あるんですね」

「あ、羊羹も食べてください。この子は洋菓子の方が好きで」

「じゃあ、いただきます」

「そういえば、猪が出るようになりましたね」

「ああ、サワさんも言ってましたよ」

「その話で持ち切りですよ」

「あのね！しょうがっこうでもいのししがすごいって」

「そうなんだね。うん。ご馳走様でした」

「じゃあ。また、今度はいつですか？」

「えーと、次は御会式ですかね」

手帳を袂から出してスケジュールを確認しながら若御前は話し続けた。

「そういえば、本堂の梁が落ちちゃってんだけど直せます？」

「じゃあ明日向かいます」

「ありがとうございます」

台下の家を出る時に家の中から隆くんが右手を振っていた。手を振り返すと更に両手を使って、バンザイをするように大きく手を振っていた。

「サワ」の家は楡戸には珍しく森のぎりぎりの開けている相野に近い場所にあり、家は雑多なものが大量に置かれている。

一昔前の箱型洗剤の段ボールや娘さんが使っていた学習机の一部だった本棚や何台もの映らないブラウン管テレビの間を上手く避けると仏壇の周りだけ何もない空間が現れる。その日もそうであった。

経机代わりの机の上には薄緑や赤や青のライターが重ねて塔になっていて、マッチの横のやすりが削れ切った空箱が二個と一本しか入っていない箱やなぜか満タンよりも多い箱があったりする。今日は塔の一番上にあったクリームソーダ色のライターで、ボシュという音と共にメグミルクのロゴのように蝋がスカート状になった蝋燭に火が付いた。

木鉦はすこし湿っているような感じがした。仏壇の扉は何か良く分からないはちみつ色の汚れがあった。

達筆な「お布施」の文字と法要のパリッとしたスーツと普段の気さくさとこの部屋を見るたびにどういう人なのだろうと思うのが常である。

お経を読み終わると「サワのおっちゃん」が冷えた缶コーヒを持って現れた。

「そこの仏壇のドアに曼荼羅がかかってんだろ」

「これですか」

はちみつ色の汚れのある扉の反対に仏壇の小さとは不釣り合いなほどの大きさの髭曼荼羅がかかっていた。

髭曼荼羅のハネは父の髭のように力強く、紙からはみ出して空中へ飛び出そうであった。
「そうよ。やっぱり迫力あるけどよ、墨が薄くなったりしてるだろ」
「そうですね。明日新しいの持っていきますから」
「あっがとよ。これ代金。あと、経回りの間にでも飲んでよ」
季節外れなほどキンキンに冷えたブラックの缶コーヒーが右手のひらに押し付けられた。
最後は溝倉である。この部落は集落のようになっており、密集している。だいたい十三軒ほどで、「クボ」「鹿居（かい）」「田持（でんもち）」「小道」「荒地」「大蔵」「崩坂（くずれ）」「三本」「草中」がある。
「大蔵」は医者である。フォントの古さと固定している釘の錆がしみ込んで茶色がかった看板を横目に診察室の奥の戸を開くと一般的な民家が現れる。しかし、この診察室に患者がいたことを若御前が見たことは一回しかない。それも幼少期に畑仕事中にちょっとふらつくという軽い熱中症にかかった「ヘリ」だけである。
経回りの際はいつも「大蔵」が椅子に座って、後ろで腕を組みながら聞いているだけである。白衣はハンガーにきれいにかかっており、皺ひとつない。
この日も同じようにお経の途中に誰かが入ってくることもなく終わった。「大蔵」はお経を聞いているうちに眠っていた。
経回りが「田持」で終わると五時だった。庫裏に帰るととんびが旋回してピーヒョロロと鳴いていた。彼の父が死んで初めての盆も同じようにとんびが旋回していた。
ＲＴＡｉｎＪＡＰＡＮの配信が始まっていたので、それを観戦しながら、「大二郎」からもらった栗の炊き込みご飯を盛り付ける。ほんのりと黄色がかった米から湯気が上がっていた。
食べた後は風呂に入る。風呂場は青いタイル張りでまさに昭和の風呂といえる。窓が歪んでいてたまに虫が入っている。
高校生ぐらいの時に一度ゲジが風呂桶の裏にはっついていたことがあり、それからこの風呂に入る時は常に気をつけていた。この日もシャンプーを叩いてから使い、すのこのような湯船のふたをそろそろと外した。
深く狭い湯船に肩までつかり、静かに天井のよくわからない鍾乳洞のような装飾を見ていると、車が表に止まった音がした。
この時間に来る人はお墓参りに来る人々である。盆は送り火がある。風呂を上がったら火をつけに行かなくてはと思っていると、急に庫裏の玄関の開く音がした。
この扉のガラガラという音がチャイムの代わりである。
「おい！若御前いるか！」
「すいません今風呂です！」
「緊急なんだ！」
「どうしたんですかー！」
「サワが、サワが倒れた」
「出ます！」
バスタオルをがさがさとやっただけで切り上げて、慌てて下着を着たまま居間に向かう。そのまま法衣を着て、数珠を持って、生乾きの頭のまま、きしむ廊下を走った。
呼びに来たのは「本家の息子」だった。話を聞くと、「本家の主人」が借りた雑誌を返しに来た時に倒れていた。心筋梗塞だろう。
「サワ」の家の周りには楡戸の人々と相野の何人かの車が止まっていた。軽自動が「サワ」の家を取り囲んでいた。
「サワのおっちゃん」は仏壇の前のあのスペースの間に寝させられていて、「本家の主人」が心臓マッサージをしていた。マッサージをするたびに「サワのおっちゃん」の体と古い家とそれが湛えている雑多なものを揺らしていた。
「大蔵」が白衣を着て何をすべきかを落ち着いて指示していた。白衣を慌てて着たのか皺だらけで、裏表が逆であった。
救急車の音が細い県道を通って聞こえてきた。しかし、その直後「大蔵」が目を開けて瞳を確認したりして、「ご臨終です」と言った。
「本家の主人」のどすんどすんという心臓マッサージが止まり、振動する音や泣き声が止まり、青年館から持ってきたホコリまみれのＡＥＤの異様にけたたましい音のみが狭い家の中で乱反射していた。
「若御前。枕経たのむわ」
「わかりました」
救急車の人に「大蔵」が話している声が聞こえた。錆びかけている鈴（りん）の音と昼聞いていたよりも更に湿った木鉦の音が響くとどうもやりきれなくなって涙が出ていた。
若御前は父が亡くなった時は寺を継ぐという意思を更に固めて泣かなかった。他の連座した人々の声を押しのけるように高らかにお経をあげた。
お経の声が途切れていることが若御前自身にも分かった。この三つの部落の人々、全員に思い入れがあった。
しかし、どうしてこんなにも「サワのおっちゃん」に涙が出るのかはわからなかった。確かに良くしてもらっ

た記憶があるがそれ以上ではなかった。
枕経が終わると、通夜の話が出た。打ち覆いの代わりに棚から取り出してきた白いハンカチをかけた。
水色の細い刺繍のN・Mが異様に際立っていた。
葬儀屋に電話をしていると皆が帰った。「サワ」の家は物が多いなりにがらんとしてしまった。
髭曼荼羅が人の指が触れたぐらいの周期で一人でに揺れた気がした。
庫裏に帰ると若御前はそのまま寝てしまった。ゲームをする気も起らなかった。
次の日起きると、おかきの銀色の箱に入った硯のセットを取り出した。「おかき」の文字も経年劣化で「お」だけになっていた。「お」も取れかかったように消えかかっている。父から受け継いだものである。
左利きの父の癖のついた硯と右端の欠けている棒状の羊羹に似た墨を擦るとじっくりと黒が広がった。
髭曼荼羅は題目を中心にして周りに他の仏の名前を書いていく。中央の題目の髭を力強く書いたところで、いきなり「サワのおっちゃん」に初めて会った時を思い出した。
その日も父の髭曼荼羅はかかっていた。初めての経回りの日にコンソメのポテトチップスをくれたのは「サワのおっちゃん」であった。奥の台所から異様に大きいパーティサイズの袋を持って来て与えたのだった。
それが何を意味するかは「サワのおっちゃん」しか知らないことだが、そのポテチにくっついていた懸賞でゲームが当たって今のようにゲームが好きになったことも思い出した。厳格な家庭にそういうものを間接的とはいえ与えてくれたのは「サワのおっちゃん」であった。
若御前は髭曼荼羅を書き終わると近くと言っても歩いて二十五分かかる個人商店に買い物に行った。
緑色の破れてバランのようになったひさしのかかった商店の、何かを貼っていたセロテープの飴色の跡のついた引き戸をあけると弱々しく「メリーさんのひつじ」が流れた。
棚はスカスカでもなく、といって充実しているほどはなかったが、目当てのコンソメ味のポテトチップスがあった。普通のサイズとパーティサイズがあったが、もちろんパーティサイズを買った。
新しい髭曼荼羅とポテトチップスを持って「サワ」の家に向かうと遺族と手伝いの人が片付けているらしく、棚やら何やらが家の外にずらと並んでいた。
「サワのおっちゃん」は完全にがらんとしたその小さな仏壇の部屋の中央に居た。
髭曼荼羅を掛けて仏壇の近くにポテトチップスを置くと、ポテトチップスが場のそぐわなさに耐えられきれないかのように前に倒れた。
柱にもたれかからせるようにポテトチップスを置くと、パッケージのキャラクターが満面の笑みで鎮座していた。それが、いつもお菓子をくれていた時の笑顔に異様に似ていた。「サワ」の家の中で唯一の笑顔だった。
若御前は帰り道に涙が止まらなくなった。
古い髭曼荼羅を焚き上げしていると、青い芒まみれの野原に風が吹いた。父の髭に似た、「サワ」のおっちゃんの笑顔の口に似た、「経」の髭の燃え端が房総の風に吹かれて山を越えていった。

※この作品に登場する人物等についてはフィクションであり、実在の人物等とは関係ありません。